

《題目》「学卒の私が、研究開発に転職 その1」

32歳の時、製薬メーカーのブリストルから、バイオテクノロジー研究用機器試薬及び臨床診断薬の販売を主業務とするバイオ・ラッド ラボラトリーズの研究開発に転職したのですが、Worldwide Companyであるバイオ・ラッドが、国立大学卒とはいえ、修士号も博士号も持っていない人材を、簡単に研究開発に雇うわけがありません。研究職という名の単なる研究補助員なら別ですが。この転職ができたのは、某医科大学の先生の紹介があったからでした。

さて、ブリストルで臨床検査業務に従事して、気が付いたことがあります、それが臨床検査の基本原則と問題点、更にその改良の必要性でした。それは、

- ① 臨床検査の測定原理は、殆どが化学反応である
- ② 但し、扱うサンプルが血液を言う極めて多種類の成分を含んでいる
- ③ 血液中の共存する成分だけでなく、薬剤なども、測定に影響する
- ④ 一部の疾患では、検査結果の意味することは判明しているが、殆どの疾患で説明されていない

※ここで言う「説明」とは、生体内のタンパク質やペプチド・遺伝子他の全てを明確にすること

- ⑤上記の説明が進めば、生体内の様々な挙動が、分子レベルで説明できる

この疑問と欲求を解決する為に、本コラム[No-01-009]の『某医科大学の先生の勉強会』へ参加したり、別の医学部の先生の部屋に通ったりしていました。この姿勢を認めてくれた某医科大学の先生が、バイオ・ラッドでの研究開発職を紹介してくれたのです。最初に言われた時、『学卒の私を雇ってくれるだろうか?』という不安を持ち、先生に話したところ、先生は『俺が、手塚君には研究開発をやるだけの知識も力量もあると認めたから紹介するのだ。もし、バイオ・ラッドが、修士号も博士号も持っていないことを理由に断ってきたら、怒鳴り込んでやるから、自信を持って行ってこい』と言ってくれたことを、今でも覚えています。

そのように先生が推薦してくれたのも、会社に言われたのではなく、自分の欲求から臨床検査と言うものを、根本原理から理解したくて、先生が主催していた勉強会だけでなく、他の勉強会・研究会にも参加していたことを認めてくれたからだと思います。(その2に続きます)